みんなお尻が青かった（ぼくらの東京物語）

森青芽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みんなお尻が青かった（ぼくらの東京物語）

【Ｎコード】

Ｎ４００８Ｅ

【作者名】

森青芽

【あらすじ】

片田舎から高校を卒業してすぐに上京した主人公。同じく地方から上京した同年代の友達と様々なことが起こる東京での新しい生活。仕事、恋愛、挫折・・・・・ダメな男はやっぱりダメだった！？作者の自伝的青春小説。

第一章　出会い　1

大久保駅北口を出てわざとらしく空を見上げながら、大きく伸びをした。今日から僕は東京で生活を始めることになる。

一九八四年、昭和五十九年、三月。

二週間前に高校を卒業した僕は、全国に何十店舗も展開する外食産業の会社に就職することになった。就職といっても正社員ではなく、この会社独自の制度で通学社員というのがあり、大学や専門学校に行きながら仕事をするというものだ。都内に男子寮、女子寮それぞれ二ヶ所の寮があり、毎年二百名くらいの通学社員が入社する。地方から来るものにとっては、住む場所もあらためて探す必要もないし、会社としても労働力を確保出来るから、ギブアンドテイクという訳だ。

僕は都内の某大手予備校に通うことになっていた。去年の十二月（三ヶ月前）に両親が離婚し、僕の卒業を待って、今まで住んでいた家も売り払ってしまっている。

つまり、家なき子である。だが、悲観的になることもなくくらくなったりもしていない。もともと血のつながりはあっても、精神的つながりはないと思っていたし、何よりどちらとも一緒に生活する気はなかったからだ。だから僕は自立する方法として、ここを選んだ。

改札を抜け、目の前の交差点を渡る。富士そばという立ち食いそば屋の前を通り、三百メートルくらい行くと、道が二手に分かれる。右側のシャトンというラブホテルの方へと進み、突き当りの丁字路の右かどに大久保寮がある。九階建てのビルで、一階から四階までがこの会社のセントラルキッチンになっていて、五階から九階までが通学社員の寮になっていた。僕の生活はここから始まるのだった。

第一章　出会い　2

建物の中に入る。片田舎で育った僕は、一人でビルに入ったことなどない。キョロキョロしながら、左手の管理人室と書かれたドアを見つけた。

「おはようございます」

緊張しながらも、なるべく爽やかに挨拶をする。第一印象って大事だからな。

「誰？」

パチンコ屋の景品交換所のような小さな窓から、禿頭のおじさんが無愛想に僕を覗き見る。

「あのぅ、今日からお世話になります吉浦ですけど・・・・・」

「ちょっと待ってな。えーと、吉浦君ね。５０２号室の三人部屋だから。荷物はなるべくエレベーターを使わないでな。上が会社になっているから、お偉いさんも来るもんでな。まっ、若いから大丈夫じゃろ」

こちらの顔を確認もせずに、事務的に処理をしようとするおじさん。

「そこの掲示板、読んどいて。三時から食堂で寮の規則や先輩との顔合わせをやるから」

おじさんの横から顔だけ出して言うおばさん。どうやら、夫婦で管理人をやっているらしい。それにしても夫婦揃って愛想がない。大袈裟に歓迎されたいとは思わないが、『よく来たね』とか『迷わなかったかい』とか、もう少し笑顔で迎えてくれても良さそうではないか。それに、二人して窓越しで説明して終わりである。初対面

にしては素っ気が無さ過ぎる。もっとも、十八・九の若者を何十人も面倒見なければならないのだから、そうそういい顔はしていられないのかもしれない。

僕はカバンを握り直し、無言でエレベーターに乗り込んだ。荷物はこれしかないのだ。

五階に上がる。Ｐタイルの冷たい音が響く。一番奥から二番目の左側が５０２号室だ。一応、礼儀としてドアをノックする。

「どうぞ」

部屋の中から声がする。僕はちょっとだけ緊張しながらドアを開けた。二人いた。小さなコタツに背中を丸めながら、こっちを見ている。僕は二人を見るとともに、部屋を見回した。備え付けの二段ベッドが二つ。反対側には学習机が四つ並んでいる。僕の横にはスチール製のロッカーがあった。八畳の真ん中に二人が入っているコタツがある。作りからして四人部屋なのだろう。悪くはなかった。自分で前もって調べた時は、一人でアパートを借りるとなれば、六畳一間でトイレ付きの場合、立地条件を考えれば、四万五千円から五万円くらいの家賃だった。大久保駅まで徒歩五分、新宿まで電車で二分で行けるのだ。それで寮費が月七千円なのだから、文句は言えない。三人部屋とはいえ、ベッドは作り付けなので、八畳もあれば結構広い。今は物がないから余計そう感じる。あとは同居人次第だが・・・・・・。

「どうぞ。寒いから早くこっちに来なよ」

右側の、笑うと白い歯がピカッと光りそうな、いかにも爽やか青年風の彼が言う。左側の彼は、関心がなさそうに手ぐしで髪の毛をとかしている。髪が肩につきそうなくらいの長髪である。

これが僕たち三人の出会いであった。

第一章　出会い　3

僕は、照れ臭そうにちょっとニヤケながら、カバンを置いてコタツに入った。

「どうも、どうも」

「これで三人揃ったわけだ。とりあえず、自己紹介する？」

右側の白い歯ピカリの彼が言う。僕は黙って頷いた。

「俺、菊原修。岩手県の江刺から来ました。四月から東海大学に通います。何かあったら色々聞くからよろしくね」

爽やかだった。僕には到底真似できない爽やかさを持っている。背中を丸めて座っているから正確には分からないが、身長も高い。

「へぇ、岩手にもエサシってあるの？北海道にも江差ってあるんだよね」

左側の長髪男が、こもるような声で言った。ちょっと訛っているな。

「そうそう、あるんだってね。でも、字が違うんだよね。北海道の方は物差しの方で、岩手の方は人を刺すっていう方の字」

「人を刺すっていうのは物騒だな」

長髪男、笑いながら言う。第一印象はすました奴だと思ったが、訛っている分、愛嬌がある。

「俺ね、笹川豊。北海道の松前出身。旅行の専門学校にいくことになっているんだけど、正直どうでもいいんだわ。向こうでバンドをやっていて、どうせやるなら東京だと思って出てきたんだ」

「何やってたの？」

「ベース。地元じゃ結構有名だったんだぜ。グルーピーもいたし」

「誰に？笹川に？」

菊原君が不思議そうに聞く。僕も同じ気持ちだった。
「もちろん。夜這いかけられた事もあったんだぜ」
僕たち二人は黙ってしまった。というよりも無視をした。初対面なのによくもぬけぬけと・・・・・・と思っていた。笹川の性格が掴めていないので、余計な事は言わない方がいい。もしかしたら冗談かもしれない。恐らく、菊原君も同じ事を考えていたと思う。
二人の視線が僕に向く。僕の番だ。
「吉浦誠。千葉から来ました。一応予備校に行くことになっているけど、どうなるか・・・・・・」
仮に大学に合格したとしても、お金に困る事は目に見えていた。母親はその時は何とかするから心配するな、と言ってはくれていたが、今更僕の方が世話になる気がない。僕自身は優柔不断で煮え切らない性格ではあるが、一人で生きて行こうと決めたのだ。優柔不断な為、いつ挫折するか分からないが、始まったばかりで全てが未定だった。
俯いている僕に、菊原君が話しかけてくる。
「千葉だったら近いよね。ここからどれくらい？」
「一時間ちょっとかな」
「何でわざわざ寮に入ったの？家から通える距離なんじゃない？」
「うん・・・・・・」
僕は返事に困った。初対面の人に僕の家族の事情を説明するのも面倒臭いし、明るく笑い飛ばして話が出来る性格でもない。
「外に行かない？ハブラシとか買い揃えなきゃいけないものがあるんだ」
唐突に笹川が口を挟む。
「そうだ、俺も買いたいものがあったんだ」
「それだったら三人で街をぶらつこうか。これから生活するのに、どんな店があるのか知っておきたいし」
笹川が立ち上がる。ワンテンポ遅れて僕と菊原君も立ち上がった。
僕がドアの方に進むと、笹川が僕の肩に手をやり、ニヤリッと笑っ

た。僕が困っているのに気付き、話題を変えてくれたのだ。とぼけた感じだが、なかなか侮れない奴だな。笹川豊。

第一章　出会い　４

昼食を一緒にとり、駅前の喫茶店『モンシェリ』に入る。後々僕たちは、事あるごとにこの『モンシェリ』に集合する。お金がないのに喫茶店へはよく行っていた気がする。

僕たち三人が打ち解けるには、そう時間が掛からなかった。そしてお互いの東京に出てきた、いきさつをそれぞれ話し始めた。

菊原君の家は和牛を飼育したり、林檎を作っている農家で、その長男らしい。本人は子供の頃から自分の手でＳＬを走らせるのが夢で、動力機械の勉強がしたくて大学に進学したそうだ。それでも親は、高校を卒業したらすぐにでも家業を継いで欲しかったらしく、やっとの思いで説得して、大学進学を許してもらったらしい。その代わりに東京での生活費は面倒を見ないのと、大学を卒業したら岩手に帰ってくる事が条件になっているという。

笹川の家は漁師をやっていて、近年漁獲量が減少しており、貧しかったと言っていた。父親は廃業も考えていたらしく、笹川はそれを感じ取って東京に出てくる気になったという。彼は三人兄弟の長男で、とりあえず家を出れば、食い扶持が減ると思ったからだと言っていた。両親も反対はしなかったらしい。

僕も両親の離婚の事や帰る家が無い事を彼らに話した。

「みんなそれぞれあるよな。でも、俺と笹川はいざとなったら実家に帰る事が出来るけど、吉浦は大変だな」

「菊原はいざとなったら帰るつもりなのか？俺は帰らないよ」

笹川が真面目な顔で言う。この男は冗談なのか本気か分かりにくいところがあるが、今回は真剣みたいだ。

僕自身、ここに来る前までは少なからず、悲劇の主人公気取りで

いたが、菊原君にしても笹川にしても、退路を断って東京にやって来ているのだ。先が見えないのは僕だけではないのだ。まだ会っていない同期の人たちも大半はそうなのかもしれない。だったら、これから始まる東京での生活を楽しもう、と僕は思った。後戻りの出来ないスタートラインに立っているのは僕一人ではないのだ。

僕は、菊原君と笹川が“仲間”に思えた。

十八歳の春。東京という巨大な敵を相手に戦いを挑む地方出身者たち。チームワークが肝心。まぁ、なんとかなるかな。

第一章　出会い　5

三時になり、僕たちは食堂にやって来た。もうすでにみんな集っている。全員で三十名くらいだろうか。僕も含めてだろうが、どこか田舎臭い初々しさを感じる。二週間前までは何処にでもいるただの高校生。今日からは花の都、東京都民。みんなどことなく緊張しているように見える。

「遅いよ。何処でもいいから早く空いている所に座って」

おじさんが顎で僕たちを促す。

「これで全員揃ったかな。まず寮の規則についての説明と、君たちの働く場所を発表するから。それが終わったら、先輩たちを紹介します」

おじさんはノートを見ながら、棒読みの説明を始めた。

誰も聞いていない。みんなの関心は、何処の店に配属されるかと言う事だ。それはおじさんも分かっていて、聞いていようがいまいが、儀式的にノートを読み上げている。

「以上、もし悪質な場合は始末書の提出及び、本社への報告が必要になるから、くれぐれも守るように。それじゃあ、先輩たちに入って来てもらおうか」

扉が開き、ゆっくりと入ってくる。全員で八名。大学生は少ないので、おそらく、一つもしくは二つ年上なのだろうが、みんな大人びて見える。

一年で僕もこうなれるのだろうか。僕は八人の先輩たちの顔を、まじまじと見ていた。

おじさんが次々に僕たちの配属先を読み上げる。一喜一憂するものや、ピンとこない者、様々である。笹川は東京駅店になり、菊原君は新宿小田急百貨店内の、この会社ではグレードの高い店に配属が決まった。やはり、容姿は大切ということだ。そして僕はというと、渋谷店に決まった。

それぞれの配属先が言い渡され、それが終わると、先輩たちの自己紹介が始まる。去年も三十名ほどの新入社員がいただろうに、一年で四分の一になってしまうのだから、かなり厳しいのかもしれない。それを物語るかのように、八名の先輩たちはみんな怖い顔をしているような気がした。

「渋谷店の大沢です。よろしく」

僕の直接の先輩になる人だ。

大沢さんは髪を刈り上げていて、黒いパンツに、肩パットの入ったコウモリの様な丈の短い黒のジャケットを着ている。黒づくめだ。当時、ＤＣブランドが流行っており、まさにＤＣブランドで極めています、という格好だった。それに細い目をより細め、ここに呼ばれたことを怒っているような顔をしていた。僕は大沢さんと、なるべく視線を合わせないようにしていた。

程なく顔合わせも終わり、僕たち三人で食堂を出ようとした時、扉の前で大沢さんが僕の腕を掴んだ。

「おまえが渋谷店か？」

近くで見ると、肩パットで盛り上がっている肩が異常に大きく見え、威圧感がある。僕は意味も無く、逆らったら殴られる、と瞬間的に思った。大沢さんはそれくらい怖い顔をしていた。

「そうですけど……」

「おまえ、すぐ６０１号室にこい。いいな」

表情を変えずに、それだけを言って食堂を出て行った」

「おっかないな」

笹川は大沢さんが出て行ったのを確認してから、僕の方を見て言った。

「吉浦、やばいんじゃない」
菊原君も心配そうに僕を見る。
「うん……やばそう」
６０１号室には行きたくない。でも、まだ何もしていないのだ。視線を合わせないようにしていたから、ガンもつけていないし、口もきいていないから、癇に障ることもない筈だ。いくらなんだって意味も無く、殴ったりはしないだろう。行きたくないけど、店の先輩になる訳だし、行かない訳にはいかない。
「このまま行って来るわ」
今生の別れのごとく、菊原君と笹川に真剣な面持ちで言った。
「気をつけてな」
笹川が言う。
「うん……」
うんとは言ったものの、何を気をつければいいんだか。
僕は足取り重く、６０１号室に向かった。

第一章　出会い　6

６０１号室の前。ドアをノックする。
「どうぞ」
僕は今日一日で、何回緊張すればいいんだか。
恐る恐るドアを開けると、大沢さんがクシャクシャな顔で笑っていた。
「びびってないで入れよ」
「失礼します」
僕は音を立てないように、そっとドアを閉めた。なるべく気に障らないよう、注意を払う。それにしても黒づくめの格好は威圧されてしまうな。
部屋の中には大沢さんの他に眼鏡をかけた人がいた。
「サワ、新入り？」
「ああ、名前、なんだっけ？」
「吉浦です」
喋るときも、余計な事は言わないようにしよう。
「吉浦君か、やっぱりまだ肌がピチピチね」
眼鏡をかけた人が僕の前に歩み寄ってきた。薄笑いを浮かべながら、僕の手を取って撫で始めた。なんだ、この人は。オカマか？
「スエキチ、やめとけよ」
スエキチさんは僕の手を離し、部屋を出て行こうとした。
「サワ、俺、出掛けてくるね」
「ああ」
スエキチさんは粘っこい視線を僕に向けながら、肩を叩いて部屋を後にした。
「悪いな。まっ、こっちに来て座れよ」
笑顔で僕を呼ぶ大沢さん。僕は大沢さんの前に腰を下ろした。スエキチさんの存在もあって、余計緊張してしまい、正座する。

「吉浦、学校は？」
「予備校に行きます」
「受験生か……キツイな。店、終わるのが十一時だから、なんだかんだで寮に着くのが十二時になるぞ。相当意思が強くないと続かない……」
大沢さんは優しそうな表情で話をしてくれた。店の状況とか寮の事を細かく説明してくれ、第一印象とはだいぶ違って見えた。外見は怖そうだったけど、案外親しみやすく、いい人みたいだ。笑い方に特徴があり、甲高くて引きつった笑い方をする。小さな目が笑うと無くなってしまい、本当に嬉しそうに笑うのだった。僕はいつの間にか緊張もほぐれ、自然に足を崩していた。
「吉浦から何か聞きたい事はあるか？」
僕はどうしようか迷った。気になっている事はある。大沢さんの服のことである。正直カルチャーショックだったし、大沢さんだって一年前は今みたいではなかったはずだ。さっき食堂で会った先輩たちを見てもそうだが、僕自身一年後の自分に興味がある。心境の変化を聞いてみたい。恐る恐る、
「その服は何処で買うんですか？」
大沢さんは意表を衝かれたようで、一呼吸おいてから、
「吉浦、アーストンボラージュ知ってるか？」
「アーストン……いいえ、知らないです」
「ワイズは？ビギは？」
「……」
何の話だがさっぱり分からない。
「丸井とか行ったことあるか？」
「駅のそばのマルイ、マルイですか？」
僕は当時流れていたＣＭのキャッチコピーを言ってみた。大沢さんは困った顔で、
「おまえ、ＤＣブランドって知ってる？」
「いいえ、全然」

「デザイナーズ&チャラクターズブランドの略。いいか、吉浦。俺ら田舎者は馬鹿にされない為にも、まず格好から入るんだよ。こうゆーの着て、正面切って歩いていれば、二・三年は東京で生活しているように見えるだろ。それに個性が出せる」

熱く語り始める大沢さん。熱く語る意味が分からない。

「まあ……」

確かに、ひとつのファッションが流行すると、右に倣えで、みんな同じ格好が流行る今と違って、当時は好きなデザイナーやキャラクターのファッションに統一することで、それなりに個性的だった。DCブランド自体が、左右非対称のものや、穴をわざと開けたもの、ねじれや歪みのある有機的なデザインなど、変わったものが多かったからだ。

「渋谷は大学生が多いからな。これくらいは当たり前だって」

当時の渋谷は、大学生の街だった。

女性はニュートラやハマトラなどの、山の手お嬢様風ファッションが流行っており、男性はジーンズ、ポロシャツやTシャツなどに紺のブレザーやジャケットを合わせることで、キレイなカジュアル、いわゆる「キレカジ」というのが流行っていた。これが後々「渋カジ」と呼ばれるようになるんだけどね。

「はぁ」

大沢さんは何で大学生を意識しているのだろう。別に彼らがどうしようと関係ない気がするのだが。大沢さんのファッションよりも、そちらが気になりだす。

「親の金で大学行って、チャラチャラ渋谷で遊んでいる奴らを見ると、ムカつくんだよな。みんながみんなそういう奴ばかりじゃないのは分かっているけど、生理的にダメだ。俺は無理してでも奴らより高い服を着ていたいんだ。家から通って大学行っている奴に、ロクな奴はいないって。間違いなく俺たちの方が偉い筈だからな」

何か偏見に満ちていて、凄い理屈である。でも、何となく分かるような気もする。どうでもよさそうだが、大沢さんから見れば家か

ら通う大学生は許せないのだろう。遊んでいる大学生を見ては、奴らには負けられないと、自分を奮い立たせてきたみたいだった。

何はともあれ、僕も大沢さんに逆らう理由はないし、早くこの場を立ち去るためには、うん、うん、と頷くしかなかった。

あまり人の影響を受けるほうではないが、なにやらこれから先は大変なんだなぁ、と他人事のように思っていた。

第一章　出会い　7

余談になるが、大沢さんの同室のスエキチさんは、末広吉行というらしい。背もそんなに高くないし、お世辞にもカッコイイわけではない。そんなスエキチさんは、合コンの時にオカマ言葉を使えば、女の子は警戒心を解くので、よくお持ち帰りが出来るという。もちろん、本人の会話も上手いのだろうが、たいしたもんだ。

「スエキチのやつ、普段でもオカマ言葉使っているだろ。練習だって言っているけど、最近本当に男にも興味あるみたいだから気をつけろよ」

大沢さんが忠告してくれた。東京には色々な人がいるものである。

四月。僕はこっちに来てから上ばかり見ている。初めて見るものに、とても興味を持つ性格なのだ。千葉に住んでいた時にはありえないほどの大きな看板やポスターが、そこらじゅうにあるのだ。活字も好きな僕は、いちいち読みながら歩いている。きっと僕を見た人は、おのぼりさんと思っているんだろうな。

僕は今、渋谷駅北口にいる。今日が初出勤。北口周辺は今ほど広くはなく、いつも人でごった返していた。スクランブル交差点を渡ろうとする時、まごまごすると、途中で信号が変わってしまうほどだった。多分、現在の倍くらいの広さはあったんじゃないかな。そんななか、僕が北口で一番驚いたのは、公衆電話の数だった。携帯電話なんて普及していなかったから、駅周辺には何十台もの電話ボックスが設置されていた。特に北口はハチ公があったので、待ち合わせのメッカになっていた為に、電話をかける人がやたらと多い。順番待ちは当たり前だった。運悪く長電話の人のところに並んでしまったら、もう大変である。イライラしながら待っている人、見て見ぬ振りしながら電話をかけている人。それを見ている僕。結構、楽しめるものである。

スクランブル交差点の先頭に立つ。右手の方に三千里薬局の大きな看板、左手には西村フルーツがある。正面には渋谷センター街のアーチが架かっている。交差点を渡り、センター街に入る。右側から、三千里薬局、ディスコビッグアップル、ダンキンドーナツ、ふぐ田、ビアレストラン・バイエルン。僕の働く店である。ヨーロッパの古い家を思わせるレンガ調の外装に、ドイツ国旗が飾ってある。間口は狭いが、奥が広くなっていた。入り口からすぐ左側が階段になっており、二階は居酒屋庄和。同じ経営である。

「おはようございます」

僕は菊原君を想像しながら、無理に明るく元気な声で挨拶した。最初が肝心だもんな。

「おっ、来たな」

最初に僕を出迎えてくれたのは、この店のマネージャーである西藤さんだった。三十代半ばの人で、耳にかかるくらいの髪を七・三に分けている。

「勝手口の方へ回ってくれ。出て角を右に行くとすぐ分かるから」

「はい」

僕は店を出て、言われたとおりに角を右に曲がる。角のアービーズと西武Ａ館の裏側になっている。その両方から挟まれるように、小さなドアがあった。肩がぶつかりそうなくらいのドアだった。僕はしばらくそのドアをじっと見ていた。

規格外の小さな入り口。好きだな。人通りの多いセンター街の雑踏の中、僕がさっとそのドアに消えていく。都会で働いている気分になる。

そして、今までとは違う世界に行ける気がした。

第一章　出会い　8

ドアを開け、急勾配の階段を上がっていくと、右手に中二階があり（男子更衣室になっている）、さらに上へ行くと庄和に出る。そこで僕たちは初めて顔を合わせることとなった。ここで僕が関わる事になるお店の人たちを紹介しようと思う。

まずは、永島店長。恰幅のいい紳士。一見優しそうに見えるが、こういう人に限って怒ると怖いに違いない。

志水副店長。四十代半ばだと思う。背が低く、七・三で髪がいつもテカテカしている。なんでも、通学社員の子を奥さんにしたそうだ。奥さんになった人は、今までちゃんと怒られたことがなかったそうで、このバイエルンで働いていた時、真剣に怒ってくれた志水副店長に惚れてしまったらしい。二十歳も年が離れていて、しかもかなり可愛いという噂だ。人間何が幸いするか分からないものだ。

西藤マネージャー。一階の責任者。いつも元気良く、バイトや通学社員の僕らをまとめている。休みなどのローテーションは西藤マネージャーが決めている。西藤さん自身も最初は通学社員で、予備校に通っていたらしい……嫌な予感がする。

上野主任。歳は五十歳くらいか。カウンターを任されていて、この人の注ぐビールは美味い。その日によって、圧や温度調節しているらしく、その方法はなかなか教えてくれない。さすがこの道三十年という感じである。以上が黒服といわれる人たちだ。

続いて二階の庄和の人たち。先輩から順に、茨城出身のくみ子さん（調理師の専門学校）。髪はこの頃流行っていたソバージュで可愛い感じだが、しっかり者。二階ホールのまとめ役である。

石垣島出身のじゅん子さん（モード系の専門学校）。いつもとんちんかんな事を言っていて、しっかり者のくみ子さんと一緒に行動している事が多い。いいコンビだ。

宮崎出身のけい子さん（調理師の専門学校）。くみ子さんと同じ

学校に通っている。一つ年上には見えないくらい、メチャメチャ色っぽい。話し方も甘ったるく、喋る時は緊張する。バイトの佐藤さんと付き合っている。

同期は山形出身のまき（保育士の専門学校）。当時流行の聖子ちゃんカットでタレ目、笑うと可愛いかもしれない。まぁ、好みの問題ではあるが……。

沖縄出身のまどか（栄養士の専門学校）。襟足を刈上げ、左目が隠れている。ゲゲゲの鬼太郎のような髪型だ。笑うと綺麗なエクボが出来る。

一階のバイエルンは神奈川出身の大沢さん（旅行の専門学校）。寮の先輩である。東京での僕の生活は、後々この人の影響が大きい。

バイトで玉川大学の佐藤さん。ジャニーズ系顔立ちで、いつもヒラヒラした服を着ている。大沢さんの時も思ったが、何処で服を買っているんだろうか。

同じくバイトで日本大学の工藤さん。百八十をこえる長身で、黒縁の眼鏡をかけている。神経質そうでちょっと愛想がない。

奄美大島出身のひろみさん（メイクアップの専門学校）。顔立ちがはっきりしていて、南国出身だとすぐ分かる。ぱっと見怖そうだが、とても面倒見のいい姉御肌。

同期は青森出身の蛯沢（モード系の専門学校）。チェッカーズを意識した髪型で八重歯がキラリ。

群馬出身の秀美（芸能界を目指すミュージックスクール）。客観的に見て一番可愛いが、何かにつけて僕に絡み、いつも僕を子ども扱いする。

宮崎出身のたか子（美容師の専門学校）。純朴で田舎っぽいが、ほっとする。一緒にいて安心するタイプだ。

以上が渋谷店のメンバーである。全国から集ったこのメンバー。なかなか個性的である。これまでの生活環境と一変するが、渋谷の小さな店で出会った彼らは僕の事をどう見たのだろう。

初出勤である僕たちは、今日一日研修を受ける。同期のまきとま

どかが黄八丈に着替えてきた。庄和のホールは女の子だけなので制服は着物であった。私服の時より可愛く見えてしまう。どうして男は着物に弱いのだろう。バイエルンの方はドイツの民族衣装である。男はブルーのワイシャツ、縁に刺繍の入った黒のベストに蝶ネクタイ。女の子はディアンドル。アルプスの少女ハイジみたいな格好で、胸元が強調されている。これはかなり個人差が出る。僕が着替えてきた秀美を見ていると、

「吉浦君、どこ見てんのよ。私の胸、気になる？」

自ら強調するように胸を張りながら言った。

「べっ、別に」

今日初対面で、冗談でもそういうことを言われると、ドキッとする。というか、普通言わないだろ。

たか子は妙におどおどしていて、落ち着かない様子である。垢抜けない感じの残るたか子だが、似合っているといえば似合っていた。ヨーロッパの田舎娘はこんな感じなのだろう。ただ、スカートの裾を引っ張ったり、キョロキョロといつまでも自分の体を見回しているので、挙動不審のハイジみたいだった。

僕たちは挨拶や接客マナー、オーダーの通し方など、一通りの流れを実戦形式で練習した。僕自身は親から自立を考えていた事もあり、喫茶店やガソリンスタンド、ゴルフ場のキャディー、雀荘の店員（親には内緒で）など、いずれも短期間ではあったが、接客業のバイト経験があったので、大抵の要領は掴めていた。

いよいよ明日からは仕事をする事になる。けっして人嫌いではないが、コミュニケーションをとることが苦手な僕は、この人たちとうまくやっていけるのだろうか、と心配になる。仕事の事より、人付き合いに対する不安の方が大きいのだった。

第一章　出会い　9

大久保寮に戻ると、菊原君も笹川もすでに帰っていた。コタツの真ん中にサイフォンが置かれている。

「どうしたの？」

僕はサイフォンを見ながら言った。

「菊原が実家から持ってきたんだって」

ふてくされた様に言う笹川。何かあったのか。

「サイフォンで沸かしたコーヒーは美味しいよ。水蒸気の圧力を利用して、コーヒーをいったん高所に上げてから、低所に移す時の微妙な時間差によって、味が変わるんだ。大気圧を利用して、美味しいコーヒーを作ろうなんて考えた人は凄いと思わない？一杯作ろうか」

さすがは菊原君。ＳＬを動かしたいと思っているだけのことはある。説明が科学的だ。

僕は彼のことをずっと“君”付けで呼んでいる。彼の明るさとか爽やかさとか、僕に無いものを沢山持っている。性格はまるで対象的なのだが、全く嫌味がない。むしろ、とても好意的に接してくれる。人見知りの激しい僕は、こういう人を尊敬してしまう。だから彼に対してはずっと“君”付けで呼ぶようになった。

「せっかくだからいっぱい貰おうかな」

「よし。味はどうする？酸味を利かせる？それとも苦味を利かせるか」

「うんと苦いのを」

「わかった」

嬉しそうに菊原君がフラスコに水を注ぐ。

「この曲管のラインが美しいんだよな」
ロートに中挽きのコーヒー豆を入れながら、独り言を呟く。アルコールランプに火をつけ、フラスコに近づけた。
僕たち三人はフラスコが沸騰する様を、黙ってみていた。
「吉浦、店はどうだった？」
笹川がフラスコを見つめたまま言う。
「うん、何とかなるかな。そっちはどう？」
僕もフラスコから目を離さない。
俺達さっき話したんだけどさ、そんなに訛っているか？」
笹川はそのままの体勢で言う。北海道と岩手出身の二人は、隠そうとしても微妙なイントネーションがこちらとは違う。
「店で言われたのか？」
「うん……カウンターが一人足りないらしいから、そっちにしようかと思って……」
フラスコの中の水がボコボコと湧き上がってくる。菊原君が素早くロートをセットする。
「意外と小心者なんだよな、笹川は。ずっと北海道に住んでいたんだから、しょうがないと思うんだけど、気になるらしいんだよ」
フラスコの水が勢いよく、ロートへと上昇していく。
「菊原はホールだろ。もし客に訛っていることを言われたら、ショックじゃないのか？」
菊原君は竹のへらを取り出して、ロート内を手際よく掻き混ぜる。本格的だ。
「訛っていて店の売り上げが関係するんだったら、俺も直そうと考えるけど、問題ないでしょ。第一、東京で働いている人の大部分は地方出身者だよ」
アルコールランプの火を消して、ロートからフラスコへとコーヒーが降りてくるのを待つ。
「でも、一つ年上の先輩に笑われた時、頭きちゃってよ。自分だって田舎モンのクセに」

ため息をつく笹川。
「気にするなって」
菊原君は立ち上がり、コーヒーカップを持ってくる。
「そうなんだよな。つい一年前までは自分だってそうだったのに、訛っている奴見ると馬鹿にしたがるんだよな。でも、それは嬉しいんじゃないの。自分も一年前はこうだったんだ、俺も成長したもんだ、って確かめているんじゃないかな。笹川に対して笑っているのと、半分は自分に対して笑っているのもあると思うよ」
菊原君が僕にコーヒーを差し出す。
「ざらめでいい？」
「ざらめまで用意してあるの？本当の喫茶店みたいじゃん」
僕は香りをかいで、最初の一口を飲んでから、ざらめを一杯入れた。
「おっ、嬉しい飲み方するね」
僕と菊原君は笹川を無視した。
「うまい。当たり前だけど、インスタントとは全然違うね」
「そうだろ、今はインスタント食品も発達しているけど、コーヒーに関してはインスタントで本物の味を出すのは無理なんじゃないかな」
「そうかもね。挽いて入れたコーヒーとインスタントは別物かもね」
「うん。インスタントはコーヒー風飲み物」
面白くなさそうな顔をしていた笹川が、
「おまえら、コーヒーの話なんていいから飲みに行くぞ」
僕たちとは目を合わせようとはせずに、立ち上がった。
僕と菊原君は笑いながら顔を見合わせる。
「何？今日は笹川のおごり？」
「だめ。割り勘、割り勘」
「ちょっと待って、サイフォンの手入れをしなきゃ」
「じゃあ、先に行ってるぞ。駅前の『村さ来』ね。行こう、吉浦」

僕たち三人はこの日、初めて東京で酒を飲んだ。
つまらない事で悩み、つまらない事で怒り、今となっては笑い話にしかならないが、当時は真剣だったのである。不安と期待が入り混じって、自分を見失いそうになった時、必ず周りにいる人間を尺度にしていた。それしか手段がなかったのだ。そのため、たまには間違った答えも出したが、彼らはいつも僕を冷静に見ていてくれた。僕も彼らを冷静に見られた。僕たちの直面する問題は、他人事ではなかったのである。
優柔不断で煮え切らない反面、色々な事に興味を持つ僕が、この東京で彼らと出会った。
一九八四年四月。
これからどうなってしまうのか、自分でも分からない僕ではあるが、とりあえず、一人ではないのだと思った。

第二章　秀美　1

大久保寮は慌ただしい朝を迎えていた。すでに学校が始まっていて、みんなが入れ替わり立ち代り廊下を行き来している。深夜に帰宅する僕たちは、少しでも寝ていたいため、朝の身支度で洗面所やトイレが一定の時間帯に集中してしまう。

僕は渋谷なので割りと近いほうだが、仕事を終えて帰ってくれば、それでも十二時くらいになる。それから風呂に入り、菊原君や笹川と話しをすれば、寝るのは早くても深夜一時になってしまう。無論、勉強どころではない。少しでも睡眠時間が欲しいところだ。

正直、当初は甘く考えていた。住む所もあり、メシも食えて給料まで貰えるなんて、いい事ずくめじゃないか。親もいないし、誰にも拘束される事なく自分の好きなように生きていける、と思っていた。

ところがどっこいである。

朝一番で寮を出た後は、夜遅くまで自分の時間など無いに等しいのだ。学校が休みでも仕事があったり、仕事が休みでも学校があったりと、一日を通してのフリータイムは一度もなかった。異郷の地で暮らす僕たちは、少々疲れ始めていた。

僕の通っている予備校は、原宿にあった。朝は七時半頃寮を出れば十分に間に合うが、菊原君は六時過ぎには寮を出ていた。神奈川県の平塚まで行かなければならないのだ。僕たちがまだベッドの中にいる時は、すでにいない。そのために、朝は殆ど顔を合わせることが無くなってしまった。夜に会ったとしても、顔に生気が無く、疲れが溜まっている感じだ。菊原君は学校が始まってからの睡眠時間が四時間くらいだという。精神的にも肉体的にも、かなり辛そう

だ。
だが、その中で一人だけ動こうとしない男がいる。
「笹川、学校に行かなくていいのか。菊原君に怒られるぞ」
「うん……今日はパス」
上半身を起こしながら、眠そうな声で言った。
四月に入ってからまだ間もないのに、笹川はあまり学校には行っていない。菊原君が心配して、僕に目覚まし役をやるようにと頼んでいった。人の心配をしている場合ではないのに。
「笹川、とりあえず起きろって」
目を瞑ったまま、髪をかきむしる笹川。
「吉浦、おまえ原宿に行くんだよな。付き合ってやろうか」
「付き合ってやろうかって、俺は遊びに行くわけじゃないの。勉強しに行くの」
笹川は僕を無視して、
「カフェクレープって、知ってる？」
「竹下通りとかラフォーレの近くにあるのは知っているけど、それがどうした」
「食いに行かない？」
「行かない」
クレープを食べるだけのために予備校は休めない。まして、一緒に行ったら菊原君に何て言われるか。
「返事早いな。そんなこと言わずに案内してくれよ。デートする時に恥かくだろ。一回原宿を下見しておきたいんだよ」
「……」
笹川は彼女がいるのか。
僕ははっきり言って、恋愛に疎(うと)い。駆け引きが面倒臭いのだ。男と女が付き合うというのは、その駆け引きが面白いんじゃないか、という人もいるが、僕はそう思ったことが無い。だいいち、女の子を見ても可愛いなと思うことはあっても、付き合いたいな、と気持ちが発展する事は殆ど無かったのである。

だが、殆どというのは、全く無かった訳ではないのだ。小・中・高と同じ学校に通っていた森高嶺さんは唯一、付き合いたいな、と思った女の子だった。彼女とは何回かデートをした事はあるが、せいぜい、映画を見た後に食事して、喫茶店で映画のここが面白かった、あそこが分からなかったなどと、批評をして帰るくらいの初心者向けデートだった。東京に行ったとしても、上野辺りまでだったし、原宿でデートするなんてことは、考えても見たことが無かった。

「頼むよ、付き合ってくれ、吉浦」

「……」

僕はちょっと考えた。森さんと原宿でデートする。頭の中でそんな自分を想像してみた。東京の街をスマートに案内する僕を見て、尊敬の眼差しで見つめる高嶺さん。はたまた、東京に染まってしまったのね、と幻滅する高嶺さん。どっちだろう。

「しょうがない。そのかわり午後からだぞ」

結局、僕は付き合うことにした。原宿を知っていて損はない。高嶺さんにカッコイイところを見せるんだ、と自分なりに盛り上がっていた。あとは菊原君に何て言おうか。

僕自身、竹下通りを歩いたことがない。予備校に行く時は、竹下通りの入り口の前を通り過ぎるが、下り坂になっているせいか、別世界の入り口のような気がしていた。一キロにも満たないこの通りには、様々な用途に合わせたファッションアイテムを提供するショップが、所狭しと点在している。

革ジャンが基本アイテムのロックンローラー族やニューリッチブームにのった、ブランド志向のＪＪファッション。キョンキョンやチェッカーズに代表されるアイドルファッション。トラッドの正統派アイビーをラフに着崩した、ブルービーファッション。最も原宿らしいとされていたのが、ちょっと派手なアイテムを着て、我が物顔で闊歩する、ニューウェーブ系キッチュファッションなど多種多様なファッションスタイルの人でごった返していたのである。

僕は例によって一つ一つの看板を読みながら、ゆっくり歩いてい

た。笹川もキョロキョロしている。みんな日本人には違いないのだろうが、こう色々な格好の人間を見ていると、人種のルツボの中にいる気分になる。僕もカルチャーショックばかり受けていられないが、あらためてみんな凄いなぁ、頑張っているなぁ、と感心してしまう。

通りの真ん中くらいの左側にクレープ屋があった。比較的普通の格好をした若い女の子たちが大勢群がっていて、僕たちには場違いな感じがした。

「ここだ」

笹川が嬉しそうに指を指す。

「並ぶのか？」

「並ばなきゃ食えないだろ。早く」

若い女の子がいかにも好きそうなフリフリの店構え。丸文字で書かれたメニューボード。

僕は乗り気がしなかった。女の子同士やカップルばかりで、男二人で並んでいるのは僕たちだけだった。僕たちの後ろにもすぐに女の子の行列が出来、その視線が気になる。僕自身、大抵の事では驚かないつもりだが、前から大勢でいる女の子だけは苦手だった。意味の無い話を聞いているだけで頭が痛くなる。しかも、初めて来た竹下通りの、この人種のルツボの中で、若い女の子に囲まれた状況はとても居たたまれない。それに恥ずかしい。

「笹川、また今度にしない？」

僕は正直、逃げ出したい気分だった。

「ここまで来て何言ってるんだよ。頼むやつ、考えとけよ」

やっぱりダメか。

僕たちの順番がきて笹川が、

「決まったか？」

「笹川と一緒のでいいよ」

何を頼もうと、どうでもいい。

「バナナチョコ生クリームを二つちょうだい」

嬉しそうに注文をする笹川。
こうして僕たちはクレープを受け取り、再び歩き出した。クレープを買ってはみたものの、歩きながら物を食べるという習慣は、原宿辺りでは定着しつつあったが、僕にはどうも抵抗があった。笹川も同じで、喜んではいるが、いつ食べようか迷っているみたいだった。しばらく二人してクレープを持ったまま歩いていた。
マヌケな光景である。
「食べるか」
「そうするか」
明治通りを男二人で無言のまま、クレープを食べながら歩いている。ああ、恥ずかしい。
僕は早くクレープが無くならないか、急いで食べた。周りを見ている余裕なんて無い。もちろん、味わってなんかいられない。高嶺さんがクレープを食べたいと言っても、美味しくないからよしたほうがいいよ、と言おう。
何にしてもこれが僕の、最初で最後のクレープとなった。これ以来、クレープ屋を見かけると笹川を思い出す。

第二章　秀美　2

笹川とラフォーレで別れ、僕はそのまま明治通りを歩いて渋谷へ向かうことにした。途中、ファイヤー通りに『文化屋雑貨店』があり、僕はここが大好きだった。喜一の塗り絵や、デットストックのガラクタ商品、何処かの蔵から引っ張り出してきたような、古臭い雑貨などが、奇抜なディスプレイによって、ちゃんとした値段で売られているのだ。ある意味アンチテーゼのようなこの店の商品を、僕はよく自分とダブらせていた。「今に見ていろ、俺だって。いつかは世に名前を残してやる」という気持ちにさせてくれたのである。普段は優柔不断で煮え切らないが、心の奥底に野心家の一面を持っている僕だった。

アンチテーゼ……この頃の僕は、出発点が違うため、至極当たり前の事だが、全てを否定して新しく始めるしかないと思っていた。

店に着くと、たか子が一人でまかないを食べている。

「おはよう」

僕はたか子の正面に座り、すぐにクレープを食べた一件を話した。

「そうなのよ。私もこの間友達に付き合わされて、古着を買いに原宿へいったんだけどさ、人混みで息が詰まりそうだった。何であんな狭い所に、人が一杯いるんだろうね」

たか子が眉間にシワを寄せながら言った。

「たか子だったら彼氏と原宿に行く？」

「う～ん、彼氏とだったら一緒に行くかもしれない」

「そうか、俺はパスだな。色々な人や物があり過ぎて疲れちゃった」

「そうだよね～」

僕とたか子は、東京にどうしたら馴染めるか話していた。お互い、

人に慣れるのに時間がかかるタイプだと分かっていたから、話し易い。
「吉浦君、彼女いるの？」
唐突に後ろからの声。秀美だ。いつの間に居たんだ。
「別に……」
そんなこと秀美に関係ないだろ、と続くはずだったが、びっくりして言葉を呑んでしまった。
「別に、じゃ答えになってないだろ、吉浦」
僕の横に勢いよく座り、笑いながらおどけて言う秀美。
「吉浦君さ、いつも口開けて上ばかり見て歩いていたら、彼女出来ないよ。真っすぐ見ていたら私みたいないい子いるんだからさ。あっ、でも、私はダメだよ。諦めて」
いつもの秀美のパターンだった。こちらがまだ何も言っていないのに、一人で話を終わらせてしまう。
「まきと蛯沢君、付き合っているみたいよ。知ってた？店に来る途中に二人を見かけたんだけど、おそろいの帽子を被っていたの。ペアハット。ペアルックなら聞いたことあるけど、ペアハットとはねぇ。おかしいでしょ」
秀美の話では、パルコから手を繋いで出てくる所を見たそうだ。僕らは初めて会ってから、まだ一ヶ月も経っていない。なのに、もう付き合っているのか。速攻だな。
「吉浦君もさぁ、ボヤボヤしていちゃダメだよ。見た目は蛯沢君と大差ないんだからさ。ねえ、たか子」
たか子が僕の顔をまじまじと見て、首を傾げながら頷いた。お付き合いだな。
「蛯沢君はフミヤみたいな髪型と八重歯でしょう。八重歯はちょっと可愛いと思うけど、私は将来性をかって、磨けば光りそうな吉浦君のほうがいいと思うけどなぁ。ねえ、たか子」
たか子は何て答えたらいいか困っている。秀美のペースでただ頷くしかなかった。いつものことだが、僕やたか子みたいな性格は言

葉を出す前に考えてしまうから、秀美との会話にはついていけなくなる。もっとも、秀美は喋りすぎるから、自分の言った事を憶えていないのだが……

「まず、洋服のセンスから考えた方がいいかもね。いかにも浪人生って感じじゃない。せっかく渋谷にいるんだから、もうちょっと周りを見て勉強した方がいいよ。分からないことがあったら、アドバイスしてあげるからさ」

「別に今のままでいいよ」

「今のままじゃダメだって。そうだ、今度一緒に丸井行こう。私が服、コーディネートしてあげる。たか子も一緒にどう？」

急に振られたたか子は、とりあえず頷く。

「よし、決まり。またあとで日にち決めよ。吉浦君、私のセンスでいい男にしてあげるからね」

と言って、秀美は席を離れて行った。自分の言いたい事を言って、勝手に納得して、嵐のように去っていく。僕とたか子は、いつも秀美の言いなりになってしまう。でも、考えようによっては優柔不断な僕にとって、有難いときもある。秀美の強引さに引っ張られるのも、悪い気はしないのだった。

たか子が僕に顔を近づけ、小さな声で、

「秀美、工藤さんと付き合っているらしいよ」

えっ、人のこと散々言っておいて、自分もやることはしっかりやっているんじゃないか。

「工藤さんのほうから言ったみたいだけどね。秀美も簡単にＯＫしたみたいよ」

「お互い、一目惚れだったのかな」

「秀美に聞いてみたの。一目惚れだったの？って。そしたら、『そうゆーわけじゃないけどねぇ、身長高いし見た目もまあまあだから』だって。なんかねぇ」

「秀美って、芸能人目指しているんだっけ」

「そうみたい。可愛いのは可愛いからね」

「でも、まきにしても、秀美にしても付き合うのって、そんなに簡単なものなのかな？」
「わかんない」
たか子は、私には関係ないわ、という感じで答えた。
確かに秀美は、みんなに好かれたいという気持ちが強い子である。男が自分に注目してくれるのを、心地よく思っているのだろう。多分、秀美自身が嫌いな男でなかったら、とりあえず付き合ってみるか、の乗りだったのだ。
いずれにしても一ヶ月足らずで、同期六人中三人が付き合い始めた。残るは、二階のまどかとたか子と僕。もし僕が、まどかかたか子と付き合うようなこととなれば、みんなあまりにも身近なところで、手を打ったことになる。何か妥協しているみたいで、いい気がしない。反面、もしかして僕も二人のうち、どちらかと付き合えるのではないかと、邪心も湧いてくる。まどかとはあんまり話したことがないから、やっぱりたか子かな。
僕がたか子を見ると、目線を合わせようとはせずに立ち上がった。
「さぁてと、支度してこよ」
僕の視線に気が付いたかどうかは分からないが、あっさりとかわされてしまった。
よし、僕も邪心を捨てて仕事しよ。

第二章　秀美　3

今日も店はまずまずの入りだった。ビアレストランというだけあって、生ビールが一番の売りで、夏はもちろんだが、季節に関係なく飲みに来るお客さんが多い。

この頃、ちょうど焼酎ブームが来るか来ないかで、「いいちこ」や「二階堂」などを飲む人が多くなってきた。「いいちこ」に至っては、キャッチコピーが「下町のナポレオン」である。上手い事を言ったものだ。庶民の高級感をくすぐるキャッチコピーであっという間に認知されてしまった。

焼酎ブームの到来とともに、居酒屋ブームでもあった。低価格で飲める居酒屋チェーン店が、渋谷にも次々と出来ていった。「村さ来」、「すずめのお宿」、「天狗」、「ペンギンズバー」などである。若者をターゲットに豊富な品揃えで、ジュース感覚で飲めるカクテル風のサワーが大流行した。

当時の世相として、素人女子大生が出演する深夜番組「オールナイトフジ」から火がついた、とんねるずの「一気」という曲がヒットし、学生の間ではこうした居酒屋で一気飲みが流行り、急性アルコール中毒が社会問題にもなったりしたのである。居酒屋に入ると、必ずと言っていいほどレジの前には、一気飲み禁止の張り紙が貼ってあった。

それでもまだ世のサラリーマンは、居酒屋ではビールか日本酒、スナックではウィスキーが殆どだった。

「吉浦、５番テーブル、オーダー取ってくれ」

「はい」

大沢さんの指示が飛ぶ。西藤マネージャーがいない時は、大沢さんが入り口の前に立ち、店を仕切っている。店の売り上げは回転率がカギになるので、入って来たお客さんを何処に座らせるかも重要になってくる。例えば、サラリーマンが二人の場合は、二人掛けの

テーブルに座らせる。殆どが生ビールを目的として来ているので、つまみはせいぜい二・三品しか頼まないから、広いスペースはいらない。男二人、酔ってしまえばなんだって構わないものだ。カップルの場合は状況によって四人掛けのテーブル。女性は食べ物中心の場合が多く、テーブルは広い方がいい。それに女性がゆったり座れると感じてくれれば、リピート率が高いという。あとは時間帯や曜日によっても違うが、ちょっとした気遣いが出来れば、売り上げが変わってくるモンなんだよ。と、大沢さんがよく言う。僕が寮の後輩ということもあってか、入社以来いつもマンツーマンで仕事を教えてくれている。

「いいか、吉浦。これはおまえが憶えるんだぞ。佐藤や工藤は出来やしないんだから、憶えてしまえば奴らに先輩づらされなくて済むからな」

大沢さんは何かにつけて、バイトの大学生二人を意識していた。初めて大沢さんに会った時、大沢さんが大学生に対抗意識を持っていたのは、親元から何らかの援助を受けているであろう、世の大学生全般を指しているのではなくて、ただ単純にこの二人が嫌いだったからだ、というのが分かった。三人とも同い年で、工藤さんは後から店に入ってきたから、大沢さんのことを一応「くん」付けで呼ぶが、わざとらしく、嫌味な野郎だと言っていた。佐藤さんはいつも着ている、あのフワフワした服が気に入らないらしい。俺だったらあんなのは絶対に着ない、と言っていたが、そりゃそうだろうと思った。おそらくブランド物で佐藤さんのような端整なマスクをあいているから似合うのであって、大沢さんが着たらちんどん屋になってしまう。口が裂けてもそんな事は言えないが、大沢さんも意外と小さい事を気にするなぁ、と思った。それにしてもムチャクチャな理由である。大沢さんの無茶振りはこれだけではないのだが……。

「吉浦、用事がないときは必ずレジの前に居ろ。裏で奴らと遊んでいるなよ」

僕は大沢さんの言うとおりに動いた。接客業の経験があるといっ

ても、これほど忙しい事はなかった。料理を運んでいる途中でいきなり注文をしてくる客もいるし、複数のテーブルから声が掛かるとパニックになってしまったりと、余裕がないためについ不機嫌になってしまう。いつでもどこでもニコニコ接客のつもりでも、慣れるまで苦労しそうである。

店内はドイツ民謡がかかっており、客席と通路が狭く雑然としたドイツ風居酒屋の雰囲気になっていた。僕らはそれを演出するかのように、わざと大量のビールジョッキを運んでみせる。僕はまだ十二本のジョッキしか持てないが、大沢さんは十四本を一気に持っていく。指は当然十本しかないのだから何処かの指に二本引っ掛けて、片手で六本を持つ。両方合わせて十二本。あとの二本は、左右六本ずつ持ったジョッキで挟み込むようにして持って行く。これはもう、プロの技である。それを見たお客さんも喜び、拍手が起こる。そして、得意げに次のテーブルへと移動して行く。

「大沢さんて、仕事している時は、カッコイイよね」

レジの前にいた僕に、秀美が話しかけてきた。

「うん、頼りになるしね。俺はどう？頼りになる？」

「吉浦君はまだまだよ。大丈夫、心配しないで。私がいい男にしてあげるからさ」

いつもと変わらず、冗談めいた言葉で返してくる。秀美の僕に対するこうした言い方は嫌味がなく、本気に聞こえてしまう。一体、秀美は僕を何だと思っているのだろうか。本当に僕を、いい男にしようと思っているのだろうか。思っているとしたら、なんで？と疑問に思ってしまう。こういつも主導権を握られていたら、後々秀美に頭が上がらなくなるのは確実だ。

「じゃあ、工藤さんは？」

意地が悪いが、たまには攻撃しておかないと。

秀美は、えっ、というような仕草でちょっと考えていた。

「うーん、いまいちかな。華がないのよね。表情が読めないし、私みたいに明るいわけじゃないでしょ。一緒にいても面白くないタ

イプ」
と意外な答え。彼氏じゃないか。真剣な眼差しで工藤さんを見つめながら言う秀美。工藤さんは自分のことを言われているとは思いもせず、オーダーを取っている。
「吉浦君、男ってさ、彼女にしちゃったら安心するものなのかね。釣った魚に餌はやらないって感じで……私はいつも情熱的なのになぁ」
ため息まじりの秀美。
「……」
今まで僕に見せた事のない、真剣な顔。
僕は返す言葉が見つからない。秀美らしくない。
秀美は工藤さんを見つめたまま、
「吉浦君はどう思う？」
僕は、真剣に答えるべきか迷ってしまった。もしかすると秀美の作戦かもしれない。落ち込んでいる振りをして、僕を騙そうとしている可能性もある。僕は疑心暗鬼になったが、それでも高嶺さんのことが頭に浮かび、
「多分、興奮して何日かは睡眠不足になっちゃうかな。彼女の事考えただけで、目が冴えちゃって眠れなくなるかもしれない。それに、毎日が楽しいんだろうな。あっ、でも、彼女が出来たらの話だよ」
恐らく高嶺さんだったらそうなるだろう。中学生の時から意識し始めて、もうかれこれ六年になる。六年越しの恋が成就するのであれば、二・三日は眠らなくったって大丈夫だ。
「そういうもんだよね。デートの前日なんか、洋服を選ぶだけでワクワクしたりして。これを着て行ったら惚れ直すかなとか、何処へ連れて行ってくれるんだろうかとか、考えちゃうのが普通だよね」
下を見ながら言う秀美。いつも笑い飛ばしている顔とは程遠い、真剣な顔。不謹慎ではあるが、不覚にも一瞬綺麗に見えてしまった。

僕はしばらく何も話さないまま、秀美のそばにいた。まだ新人なので、積極的にホールを動かなければならないのだが、元気のない秀美が気になってしかたがなかった。あの秀美でも悩み事はあるんだな、でも、辛かったら辞めちゃえばいいのに、恋愛をした事のない僕は、単純にそうとしか思わなかった。

もし、高嶺さんと付き合うことが出来たならば、僕にはそういう悩みなど生まれてくるはずがない、と勝手に思っていたからだ。まだ男と女の間に起こるすれ違いや障害など分からない僕は、秀美の悩みを理解する事なんて出来ないでいた。

第二章　秀美　4

軽快なドイツ民謡が流れる店内。それをかき消すかのように話し声で騒然としている。レジの回りだけ、冷たい空気が流れる。

「偉いぞ、吉浦。よく言った。普通そうだよね。毎日が楽しいもんだよね。もしかして、好きな子いるでしょ？」

顔を上げ、笑いながら言う。心なしか、強張っている。一所懸命な作り笑い。無理してる。

「秀美が聞いてきたから答えただけだろ。好きな子なんていないよ」

高嶺さんへの片思いを、秀美に知られたら大変なことになる。これだけは、バレない様にしなければ。

「誰よ、たか子？」

「いないってば」

「じゃあ、今度デートしてあげようか。私を連れて歩いたら、鼻高々じゃない？たまにはしてみたいでしょ、デート」

なんでそーゆう事になるかなぁ。一瞬でも綺麗に思ってしまった自分が馬鹿だった。無理にでも自分のペースに戻そうとする秀美。恋愛をしたことのない僕には、秀美に掛けてやれる言葉がない。無責任な言い方だが、彼女には嘘でも笑っていたほうがいい。そのほうが秀美らしい。僕のことをおちょくる態度は気に入らないが、多分、秀美とはずっとこんな感じなのだろう。僕はこのまま黙って秀美のそばにいた。

閉店になり、一人渋谷駅に向かっていた。帰り際に秀美が駆け寄

ってきて、
「今度、本当にデートしようか。吉浦君、奥手そうだから練習台になってあげるよ。真面目な話、私を好きな相手だと思って、女心を勉強しなよ」
と言った。バレてるみたいだな。
十二時近いというのに、渋谷にはまだまだ多くの人がいっぱい居た。酔っ払っている人や、家路を急いでいる人、これから何処へ行こうか相談している若者達。様々な理由でこの渋谷に居るのだろうが、十八歳の僕は、何故渋谷に居るのだろうとたまに思う時がある。
仕事があるからです。
自嘲気味にそう思うしかないのだが、空虚な心は見るもの全てが羨ましかった。彼女が出来たら少しは変わるんだろうな。まきや蛯沢や秀美もそう思ったのかな。僕は電車に乗りながらも、ずっと考えていた。
原宿、代々木、新宿と色々な人々が乗り降りしてくる。人の数だけ色々な思いがあるものだ。でも、今の僕には何も無い。目標のない勉強。生活のための仕事。十八歳の僕の心は無戸室(うつむろ)にある。
ええい、このままではダメだ。暗くなってどうする。今は必死に抵抗するしかないのだ。
新宿から乗り換えて大久保に着く。
何を目指して抵抗する？歩きながら考えても、答えは出ない。一番いいのは流されることだ。人混みに紛れて流されよう。
寮の灯りが見えてきた。
でも、流されてしまったら、自分の主体がなくなっちゃう？それでは、いつも心が閉ざされたまま。
街頭に群がる虫たち。
僕も灯りに飛びつこう。天高くまで上がらなくとも、ふわふわと漂うくらいに飛べれば、何かが見えてくるかもしれない。そうだ、とりあえずは背伸びをしてみよう。
とまぁ、こんな事を考えながら、僕は電車に乗っている毎日だっ

た。

第二章　秀美　5

寮に戻ると、菊原君だけで笹川は居なかった。
「笹川はまだ帰っていないの？」
「うん、仕事が終わってから飲みにでも行っているんじゃないかな」
「あっ、そうだ、ごめん。今日笹川に誘われて、一緒に原宿行っちゃったんだ。俺は学校に行ったけど、笹川はまたサボリ」
菊原君に今日の一件を話した。
「しょうがないよ。吉浦が悪いわけじゃない。本人の自覚の問題だからね」
ため息をつく菊原君。かなり疲れた顔をしている。
僕は気を利かせるつもりで、
「たまには俺がコーヒーを入れようか」
「うん、頼むね」
菊原君の持ってきたサイフォンでコーヒーを飲むのが日課のようになっていた。色々なマメの種類や挽き具合を変えて僕らなりに楽しんでいた。
「俺、結構辛いわ、もう挫けそう」
僕がサイフォンの準備をしていると、菊原君が独り言のように呟く。
「やっぱり……全然寝ていないモンね。俺なんか学校も職場も近いからいいけど……」
僕はなんて言葉をかけていいのか分からず、アルコールランプに火をつけた。二人ともしばらく沈黙してしまう。
「吉浦、小さい頃の夢って何だった？」

菊原君が先に話してきた。
「俺？そうだな、実は小学生の頃から、小説みたいなものを書いているんだ。作家になりたいとは言わないけれど、物書きになれればな、って思っていた。っていうか、今でもなりたいんだけどね」
「へえ、じゃあ、そのための大学？」
「うん、高卒よりは大卒の方が、とりあえず、物書きになりやすいんじゃないかと思って」
「そうか。なんで物書きになりたいと思ったの？」
「小学校一年生の時だったかな、ディズニーの絵本かどうかは憶えてないんだけど『青い車』って絵本があったの。オンボロの青い車が主人公で廃車になる寸前で、ある人に引き取られて、レトロカーとして立派にに復活する話だったんだけど、絵本だからね。その青い車のフロント部分に口があって、喋るんだよ。人間みたいに感情表現するんだけど、それがとっても衝撃的で、印象に残って頭から離れなかったんだ」
「ふうん」
「だからいつも、見るもの何でも擬人化していた。例えば、この電柱はどんな声なんだろうか。このポストは何て喋るんだろうかってね」
「寒いよ。動きたいよって」
「ううん、ポストは赤いから、寒がりのイメージはない」
「腹減ったよ、かな」
「うん、お腹いっぱいで動けない。早く出すもん、出してくれって感じ」
「へえ、変わっていたんだね」
「うん、変わっていたのかもしれない。でも、その変わっているって言われるのが凄く嫌でね。そうだ、それなら書いて一人で遊んじゃえ、っていうのが、書き始めたキッカケかな。一人で書いて楽しんでいたら、別に誰にも変わり者って言われないしね」
「で、どんなの書いていたの？」

「六年生の時に『百円玉の大冒険』っていうの書いた。とにかく、何でも喋らせたよ。『ぼくは百円玉だ。しかし顔が悪い。君は不思議に思うかもしれないが、お金の世界にも顔の良し悪しというのはあるのだ。ぼくのご主人様は貧乏性で気が小さい。最後の最後まで、ぼくである百円をいつも残している。ぼくは財布の中にいつまでもいるために、十円玉や五円玉とぶつかって、多くの傷が出来てしまったので、顔が悪い』っていうやつ」

「へえ、面白そうだね」

「うん、学級新聞に連載していた。結構評判が良くて、先生なんかも早く書けって喜んでたな」

僕は小学生の頃を思い出す。あの頃は純粋に、間違いなく作家になるのだ、と信じて疑わなかったのだ。

「菊原君は何でＳＬなの？」

僕はコーヒーを菊原君に差し出す。

「ありがとう。俺も子供の頃の衝撃的な出会いかな。田舎だから汽車が煙を上げながら走っていたんだよね。田んぼや畑の中を走っている汽車が、とても力強くて、かっこよくて。ああ、俺もこうなりたいな、って。運転するよりも、これを作ってみたいと思ったんだよ」

「今走っている電車じゃダメなの？」

「ダメ。イメージが違う。だったら、これからのリニアモーターカーの方が、力強そうでかっこいい気がする」

「そういうものかな」

僕たち二人はコーヒーを飲みながら、また黙ってしまった。子供の頃の夢と、今の自分を比較している。絶対なれると信じて疑わなかった、あの頃の高揚感を思い出す。子供の頃の夢を実現出来た人は、どれくらいいるのだろうか。

少なくとも僕たちは、その夢を実現させるために、東京へ出てきたのだ。

「もう少し、生活に慣れるように頑張ってみようかな」

「うん、俺も時間を切り詰めて、短編でも書いてみるかな」
僕たちは何処を見ているわけでもなく、独り言のように呟いた。
思い込んだら試練の道を、ゆくが男のド根性。
という気分で、二人してコーヒーを飲み干した。
ゆけゆけ飛雄馬、どんとゆけ。

第二章　秀美　6

「前略。

若葉が芽吹き、辺りは新緑の薫る季節となりました。

お互い受験に失敗し、浪人生という社会的地位のない状況に甘んじることとなってしまいましたが、草木同様、来年に向けて花を咲かせるため、高嶺さんも頑張っている事と思います。

僕は色々な事情（説明するのが面倒臭いので、省略します）があり、東京にいます。働きながら予備校に通うことの出来る会社に就職し、その会社の寮で生活しています。

お元気でしたか。

僕のほうは少しずつですが、東京の生活にも慣れ始め、ようやく勉強にも手がつくようになって来ました。やはりこちらは都会ですね。当初は見るもの全てが目新しく、いつもキョロキョロしていたものです。

僕の同室の二人（北海道と岩手出身）も、とてもいい人で仲良くやっていけそうです。

岩手出身の人（菊原君といいます）は大学生で、一緒に生活して分かったことですが、大変なんですね、大学生って。楽でいつも遊んでいるイメージだったのですが、実際は一年目で真面目に単位を取っておかないと、留年の危機になってしまうみたいですよ。大学生になったら目一杯遊んでやる、ということは出来ないみたいです。

北海道出身の人（笹川といいます）とは、二人で原宿に行ってきました。凄いですよ。僕にはカルチャーショックです。僕もあのくらい自己表現を出来れば、人生も変わるんだろうな、と思いました。みんな恐らく、僕たちのような地方出身者だと思いますが、頑張っているなぁ、というのが第一印象です。

何をそこまで君をそうさせた？

興味津々で、思わず話しかけたくなるほどでした。

仕事場のほうもいい人ばかりで安心しました。人見知りする僕にとっては、そちらの方が心配でしたが、同期のみんなを呼ぶ時なんかは、下の名前を呼び捨てにするんですよ。例えば『高嶺、おはよう』なんて言っちゃうんですから。高校時代ではとても考えられない事です。口が裂けても言えません。

とまぁ、今のところ僕にとっては東京は飽きない街で、色々な興味を抱かせてくれます。しかし、まだ社会的地位のない浪人生の身。今は耐え難きを耐え、忍び難きを忍ぶ時期です。余計な事を考えないようにしなければ……と思う毎日です。

それはそうと、村田や岡田は元気でやってますか。あいつらも高嶺さんと同じ予備校だったなんて、ちょっと後悔です。東京行きは早まったな、と思いました。みんな一緒だったら高校の時みたいに、ワイワイと楽しくやりながら勉強も出来たのに……。

でも、自分で選んだ道です。今度会う時は、少しは大人になった僕をお見せします。僕が東京の人になったからって、驚かないで下さいね（ちっとも変わっていないところに驚いたりして）。

話はあちこち飛びますが、高2の時、高嶺さんが『これ面白いから読んでみて』って言って、貸してくれた『風の谷のナウシカ』。あれ、映画化されたんですね（只今、劇場公開中）。さすが高嶺さん、先見の明があるなぁ、と感心しました。漫画ではストーリーが途中になっていましたが、映画では完結しているんでしょうか。もしよかったら、一緒に見に行きませんか（さりげなくデートの誘いをしたりして）。浪人生もたまには息抜きが必要です。夏を過ぎたら地獄が待っているのですから。それに、みんなの話も聞きたいですし、僕がどんな所で働いているかも見せたいですし。

それでは、駄文で申し訳なかったですが、体に気をつけ、勉強頑張ってください。

草々。

森　高嶺さんへ

吉浦　誠　　」

「前略。
お手紙、ありがとうございます。
吉浦君のお家がおおいうことになってしまったなんて、全然気がつきませんでした。
何で言ってくれなかったんだろう、水くさいな、と思っている間に、今度は吉浦君も東京に行ってしまい、何が何だか。
普段、当たり前のようにいた人がいなくなるっていうのは、こんなにも淋しいものだとは思いませんでした。何も言わずに突然いなくなるなんて、心配しちゃいましたよ。
村田君や岡田君たちは『いつものことだから、しばらくは連絡ないと思うよ。周りを確かめ終わってから、連絡してくるよ』『そうそう、変な事する時は一人で先走るからなぁ。少し経ってから、事後報告で終わり。いつもの事だよ』ですって。全然心配する様子なんかなかったんですから。よく知っているんですね。小学校からの付き合いとはいえ、男同士の友情なんて私には分かりません。
でも、こうしてお手紙をいただき、少しは安心することが出来ました。
お元気そうですね。本当に良かったです。
吉浦君の言うとおり、浪人生って本当に肩身が狭いですね。特に女の私は、親戚や知人に浪人した事を聞かれるのが、とってもイヤです。はっきり言って、うっとうしいです。ですから、今は家と予備校の往復がほとんどで、遊びに行くのも控えています（浪人生だから当たり前なんですけどね）。
『風の谷のナウシカ』は、ごめんなさい。もう、見てしまいました。D組にいた山口聡子と見に行ったのですが、彼女のこと憶えてますか？私も三年生からの付き合いでしたから、吉浦君はあまり記

憶にないかもしれませんね。
彼女、イラストレーターを目指しているんです。いわゆるアニメおたくというか、ちょっとした変わり者です。吉浦君も負けちゃうくらいのね（笑）。
その彼女が今度、同人誌を作りたいと言い出して、毎日のように浪人生の私の家に来ては発刊の準備をしているんですよ。私の家で、ですよ。仕方なく私も雑用係でお手伝いしています。受験生なのに、ぐすん（涙）。そこで吉浦君にぜひともお願いがあるのですが、短編を一作書いてもらえないでしょうか。受験生であることは百も承知、その上、仕事もあるのに勝手なお願いだとは思いますが、私の知り合いで小説を書いている人といえば、吉浦君か岡田君でしょ。やっぱり吉浦君のほうが頼み易いですし。
お忙しいところ申し訳ないですが、一肌脱いでください。じっくり見てあげます（笑）。
久しぶりだったので、ダラダラと書いてしまいましたが、小説の方、宜しくお願いします。
仕事に勉強に大変でしょうけど、どうぞお体に気をつけて。

かしこ。

吉浦　誠様

森　高嶺　」

グッドタイミングである。やはり高嶺さんとは、どこかで通じ合っているんだなぁ、と有頂天になってしまうほどである。小説を書いて欲しいだなんて。
もう書いてますよ。高嶺さん。
金がものをいう時代。買収、賄賂、慰謝料、示談金、お金で全ての事柄が解決する世の中に嫌気がさしている主人公。オチは半狂乱

になった主人公が、誤って封印していた貯金箱を落としてしまう。中からお金が散らばり、一万円札や百円玉などが、一斉に喋り出す。これが本当の、金がものを言う時代。落語的なオチだが、いいだろう。あとは、オチが分からないように中盤をどう引っ張るかだな。

結果的に、デートの誘いは断られてしまった訳だが、最近では一番の嬉しい出来事である。体の中から力が湧いてくる感じがする。

僕は、高嶺さんからの手紙を何度も読み返しながら、ニヤリと笑うのだった。

第三章　たか子　1

五月に入り、ようやくみんなも落ち着いてきた。どう落ち着いてきたかというと、既に五人もの退寮者が出始めたのである。そのうち三人は大学生で、特に理系の人は実験やリポートなどの提出物が多く、少しでも時間を確保したいために、大学の近くに移って行った。

菊原君も心配である。

大沢さんの話によると夏が終わる頃までには、半分に減っているのではないかという。とりあえず東京に出てくる足掛りとしてこの会社に入ったわけだが、三ヶ月も経って慣れてくれれば、もっと率のいいバイトを探してきたり、もっと自由が欲しくなってくるのだ。

僕たちは遊びたい年頃である。

寮の門限がどうしても窮屈に感じるし、三人部屋という事もあって、プライベートもままならない。そうした理由で徐々に退寮者が増えてくるという。夏休みになり、多少なりとも東京での遊びを覚えてしまえば、寮生活は面倒くさくなる。それでなくても、十八歳の僕たちにとって、東京はとても刺激的な街なのだ。

「あれ、今日はおまえら休み？」

机で菊原君は勉強、僕は小説を書いている時に、肩から大きな紙袋を提げた笹川が部屋に入って来た。出会ってから一ヶ月が過ぎたこの頃になると、僕も菊原君も笹川の言動には驚かなくなっている。今更その大きな紙袋は何だ、と聞く事もないのだ。

笹川が重そうな紙袋をベッドの上に置いてから、

「三人が休みっていうのも初めてじゃないか。どうだ、飲みに行かないか」

僕と菊原君はお互いに顔を見合わせた。そう言われればそうかもしれない。それぞれの店でローテーションが組まれているので、休みの曜日が一定ではない。三人が同じ日に休みになるのは、初めて

だった。菊原君と目を合わせた僕は、
「村さ来」
「うん」
頷く菊原君。
大久保駅北口の近くにある『村さ来』は僕たち大久保寮の寮生にとって、行きつけの店になっていた。ツケがきくのである。給料七万円弱で生活している僕たちにとっては、強い見方であった。
大沢さんと飲みに行った時に、
「吉浦、金がない時に、どうしても飲みたかったらここへ来いよ。ここの店長はいい人だから、金がなくても飲ませてくれるからな」
「サワ、聞こえているぞ。ヨイショしてもタダにならねえからな」
大柄で角刈りの店長。ドスの利いた低い声で言う。知らない人が聞いたら、喧嘩している雰囲気だ。
「誰もタダにしろっていってねえじゃん。出世払いだよ。出世払い」
「だったら早く出世しろよサワ。じゃねえと、店が潰れちまうよ」
「俺が旅行会社に入ったら、店長のこと、タダで海外に連れてってやるからさ」
酔っ払った勢いか、得意げに言う。
「はいよ。期待しないで待ってるからな」
店長は焼き鳥を焼きながら、面倒臭そうに言う。お互いに笑顔はなく、ごく普通の聞き流してしまいそうな会話だった。
「なっ、吉浦」
コップに入っていたビールを一気に煽る、大沢さん。
こんな大沢さんと店長のやり取りで、飲んだお金は給料日にまとめて払えばいい事になっている。大沢さんも先輩に教えてもらったそうで、大久保寮の人たちは面倒見のいい店長のおかげで、助かっているのだ。
「こんばんは」
僕たち三人は、勝手知ったる我が家のように店へ入った。

店長がカウンター越しに僕たちを確認しながら、
「サワはいないのか」
「はい。今日は僕ら三人だけです」
「そうか、何飲む？苦学生」
「とりあえず、ビールを二本」
大人になった気分である。まだ席にも着かず、メニューも見ないうちから、とりあえず、なんて言えるようになったのだ。
「サワにツケておくから、遠慮せずに飲みな」
店長は笑顔で五本の瓶ビールを僕たちの前に置いた。
「足りなかったら今度は、スエキチにツケておくから言ってくれ。どうせ、やつらは散々ツケしやがるから、わからねえよ」
僕たちは店長に軽く頭を下げた。きびすを返し、後ろ向きに手を振る店長。
いいなぁ、こういうのって、と思ってしまう。お互いの信頼関係があるから出来る訳で、店長が僕たちにビールを出してくれたことを、大沢さんやスエキチさんが知ったからといって、何も言わないだろうし、店長も分かっていて、それをしている。ツケをしているから、その弱みという事ではなく、逆によく気が付いたな店長、くらいの感覚なのだ。だてに先輩面している訳ではなくて、後輩の面倒を見るのは当たり前の事だと思っている。だから、僕たちも先輩の言うことは素直に聞いた。今時は、先輩後輩が友達感覚になっているが、この頃の一つ年上といえば、神様みたいなものだった。これから僕たちにも後輩が出来たら同じようなことをするだろうし、その為にも先輩としていい事も悪い事も伝えていくのが、先輩の役目であったのだ。
僕たちは、店長が出してくれたビールを感謝しながら気持ちよく飲み始めた。
「笹川、最近全然学校に行ってないだろう」
菊原君が言う。笹川はメニューを見ながら、
「冷やしトマトとしめさば、あとは、かえる二つ。吉浦は？」

菊原君を無視して、僕にメニューを渡す。僕はメニューを受け取りながら、横目で菊原君を見た。本気で説教が始まりそうな雰囲気だった。菊原君自身、生活のリズムを安定させる為、必死でもがいているところなのに、笹川は学校に行かず、毎日遊び歩いている。菊原君は、笹川がこのまま辞めてしまうのではないかと心配しているのだ。飲んだ席でよくあるパターンだが、菊原君が爆発し、荒れてしまいそうだった。

「まあまあ、そういえば、さっきの大きな紙袋、あれ何だったの？」

僕が話題を変えようとする。

「最近、ストレスが溜まって」よ、ぱーっと十万円分、洋服を買って来ちゃった」

呆気にとられる、僕と菊原君。一瞬考えてしまった。ストレスが溜まっただぁ、洋服を十万円分？何を言っているんだ、笹川は。

「十万円って、よくあったな、そんなお金が」

「ああ、タカQでローンを組んだ。こうなりゃヤケクソだよ」

何も言えなくなる菊原君。当然、説教する気もなくなる。

「ローンは払っていけるの？」

菊原君の代わりに僕が聞く。

「吉浦は甘いな。そういう事を考えちゃダメなんだよ。ヤケになったから手当たり次第に買っただけで、普通に考えたら払える訳ないでしょ。まずは買う。後はどうにかなるもんだよ。まあ、未成年だから、実家の連絡先を書かされたけど、親父はもっとひどいからな。そんなもん知らねえよの一言だろうな」

他人事のように言う笹川。いい度胸をしているな、と思ってしまう。いい度胸というより、無茶苦茶な性格だよな。

僕と菊原君は対照的な性格だと思ったが、笹川はまったく違ったタイプの人間だ。ある意味大した奴だな、と感心してしまう。考えるのが苦手というか、これまでは本能のままに生きてきたのだろう。東京へ出て来て、少しは考える事が多くなってきた為に、ストレス

を感じてしまった。おそらく、僕たちから見れば些細な事でも、笹川には大きなストレスになってしまったのだろう。
菊原君は何も言おうとはしない。というより、薄笑いを浮かべている。笹川に何を言っても無駄……真面目にみんなと仲良くやってきた自分と、自分勝手で不真面目な笹川。相容れないのは当然である。悪い意味ではなく、今まで理路整然と生きて来た菊原君は、理解不能になっていたのだ。
「菊原も吉浦も後で見といて。欲しいのがあったら、買い取ってくれない？」
まだ僕たちは十八歳だが、笹川のこういう生き方は、何歳くらいまで通用するのか、僕は興味が湧いてくる。
菊原君が無言でコップに入ったビールを一気に飲み干して、
「誰か、日本酒飲む？」
「俺、日本酒ダメなんだ。ビールでいいよ」
笹川が言う。僕は、日本酒を飲んだ事がなかった。だが、菊原君に付き合おうと思った。酔いたい時ってあるんだな。こうしてお酒の力を借りるというのも、大人になるんだなぁ、と実感する。
菊原君は笹川をりかいしようとするのは辞めた。いい意味で共存の道を選んだのだと思う。それぞれの悩みの違いはあるが、それぞれの方法で解決しようとしている。世間は広いのである。色々な人間がいるのだ。
それから僕たちは、かなり飲んだ。
菊原君は、蒸気によって何でＳＬが動くのかという難しい話。笹川は、一人で新宿のツバキハウスやディスコニューヨークニューヨークに行った話。僕は、何で今、小説を書いているかというちょっと照れ臭い話。それぞれが自分の好き勝手な話しをした。お互いにとってはどうでもいい、興味もなく、分からない話ではあったが、少しでも理解しようとした。それは、今現在の自分たちの居場所を確認し合っているようでもあった。
いい加減飲んで、ほろ酔い気分で店を出て、三人で東京の空を見

上げる。月明かりに照らされて、うっすら雲がかかっている空に、ぼんやりと数えられるくらいの星が出ている。鈍い光を放つ都会の星たちも、これはこれで悪いもんじゃないな、と思うのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4008e/

みんなお尻が青かった（ぼくらの東京物語）

2010年10月9日12時04分発行